

防災特集

忘れていませんか
あの日のことを……



阪神・淡路大震災で倒壊した高速自動車道(上)と倒壊家屋の前を足早に歩く人々



昭和三十九年六月十六日午後一時二分、栗島の南方海底四十キロを震源とした、マグニチュード七・五の新潟地震が発生しました。
本市では死傷者百三十六人、家屋の損害は約二万世帯という大被害を受けました。
あの日から三十三年が経過し、人口の増加、建築物の高層化、車社会へと、まちは変貌を遂げました。もし、今またあの恐ろしい地震が発生したら……
平成七年一月に起こった阪神・淡路大震災では、約六千三百人の犠牲者を出し、発生より二年を過ぎた現在でも、仮設住宅で生活を送っている人がいます。まちは復興に向かっていますが、多くの人の心には大きな傷跡が残りました。
「天災は忘れたころにやってくる」という教訓をもう一度思い出し、どうしたら自分や身近な人のかけがえない命を守ることができるのかを、この機会に考えてみましょう。

新潟市の主な取り組み

①地域防災計画

現在の都市構造や社会状況に対応できるように、従来の地域防災計画を見直し強化しています。平成九年度内には新しい地域防災計画を策定する予定です。

②防災関係の組織強化

従来の交通防災課から防災部門が「防災課」として独立しました。消防局では「救急救助課」を新設し、救急・救助部門を一体化しました。また、防災課と消防局間で職員の人事交流を行い、防災に関する組織の強化を図っています。

③災害時の通信網の整備

大きな災害の発生により電話回線の寸断などが起こっても、的確な情報を円滑に双方で通信できる「地域防災無線」を、市内の公的施設などに約三百局配備しました。
また、災害現場の状況をいち早く把握し、通信衛星を使うことでその画像を国、他都市の消防局に電送できる「画像電送システム」を整備しました。

④備蓄

水やお湯を注ぐだけで食べられるアルファ米や乾パンなど五万一千食水、毛布などを市内十五カ所に分散して備蓄。また、市内十カ所に飲料水と兼用できる貯水槽を設置しています。市民病院でも入院患者、職員の食料、水医療品などを備蓄しています。

⑤木造住宅の耐震診断

昭和五十六年以前の家の耐震診断を希望する市民に対して、五万円を限度に調査費用の半額を補助しています。また、簡単に自己診断できる方法を解説したパンフレットを建築指導課、市役所本館、分館の案内、地区事務所で配布しています。

⑥水道の配水ブロック計画

地震が起きたとき、水道管の被害地域を最小限にし、断水地域をできるだけ小さく抑えるよう、市内をブロックごとに分け、あるブロックが被害を受けても、ほかのブロックで補えるように整備を進めています。

⑦特殊指揮隊車などの配備

長時間に及ぶ消火活動や救助活動に威力を発揮し、大規模災害時の現場指揮や後方支援の拠点となる特殊指揮隊車や、四輪駆動の災害対応型高規格救急自動車の購入など、災害時の救急救助体制の強化を進めています。

⑧災害援助協定

大災害発生の際は、行政機能も損害を受けるため、他市町村などと連携をとり速やかに対応できるように、周辺十九市町村、中核市、ライフライン関係企業などと相互応援協定を結んでいます。

また、住民票、国民健康保険、国民年金などの、電子計算機処理の行政事務データのバックアップを相互に保管することで、大規模災害が発生しても行政サービスが停滞しないよう、六月五日に長岡市と協定を結びました。

新潟地震あれこれ

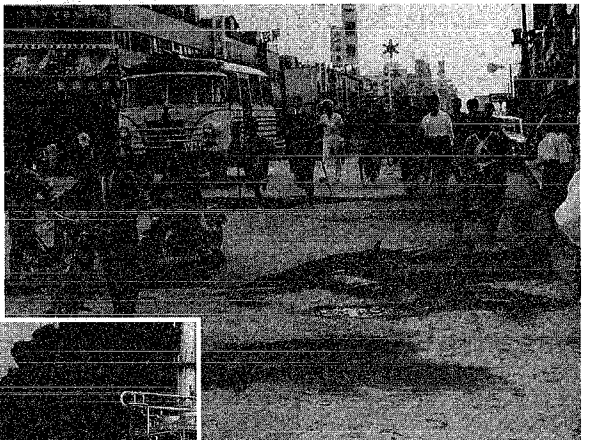
〈本市の被害概要〉

- 死者…11人
- 重軽傷者…125人
- 被災世帯…約33,000世帯
(全市世帯数の40%)
- 被災総額…約1,048億円
(当時の市の一般会計予算の21倍の額)

〈災害応急対策の概要〉

- 避難場所…入舟地区、東新潟地区の小・中学校など27カ所
(開設期間は最長30日、収容者数は1日あたり、多い日で21,000人)
- 食糧…にぎり飯は約679,000食、パンは約92,000食
- 給水車…46日間出動(延べ4,971台、総給水量は76,772t)
地上管による仮配水管施設は1カ月後
- 停電復旧…段階的に実施、100%送電は30日後
- 電話復旧…国の各機関・県・県警察・市などの防災関係機関は数時間後、15日後に約86%が復旧

三十三年前の六月十六日、午後一時二分にマグニチュード七・五の強烈な揺れが本市を襲いました。
激しい揺れ、地面の傾斜、陥没・隆起、地割れからはおびただしい泥水が噴き出しました。
また、信濃川の護岸堤が倒壊し、海抜ゼロメートル地帯に水が浸入しました。ほどなく来襲した十四波もの津波により、浸水被害は市内全域に拡大。床上浸水一万二千八百三十三世帯、床下浸水は二千五百一十一世帯に及び、一週間以上も水が引かない地域もありました。
そして、石油タンクの爆発炎上、三百六十時間にわたり燃え続け、息詰まるような黒煙が市内上空に高く大きく広がりました。石油タンクから流出した原油で、臨港町周辺は一面焼け野原となりました。



新潟地震